「エヴィデンス」の再生に向けての確かな歩み

―小林隆児・西研（編）『人間科学におけるエヴィデンスとは何か』（新曜社，2015）

東京大学大学院教育学研究科　能智正博

　「エヴィデンス」とは、本書でも説明されている通り、簡単に言えば「証拠」や「根拠」のことである。この言葉は現在、様々な領域の対人援助の実践家やその領域に関する知を生み出そうとする研究者の間に広がっている。日本語を使えばいいのに、わざわざ横文字言葉を使うところなどかなり胡散臭い。使い始めたのは私の知る限りでは医療領域である。「エヴィデンス・ベイスト・メディスン」という言葉がある。個人的な狭い範囲の経験ではなく、多くの人が納得するデータに基礎づけられた治療を行なおうというくらいの意味で、主張されていることはまあ常識的に理解できる。しかし、現在流通している「エヴィデンス」には、そういう常識を超えたいろいろなニュアンスが付け加わっていて、それに違和感を抱く人も少なくない。にもかかわらず、心理臨床をはじめとする対人援助実践を社会システムのなかに組み込もうとする政治的な動きのなかで、なかなかその違和感を積極的には言い出しにくくなっているのが現状である。前置きが長くなってしまったが、本書はそうした違和感のありかを言葉にし、そのもつれをほどくための手がかりを示した貴重な１冊である。

　本書の背景にあるのは、現在の「エヴィデンス」の概念が実践の現場に持ち込む矛盾にほかならない。現在のそれは、ランダム化比較試験（RCT）を頂点とする序列のもとに置かれており、実践者の「主観」がもっとも排除された実験デザインに基づく客観的エヴィデンスこそが「エヴィデンス」に値するとされる。エヴィデンスをそうしたものに限定する場合、実践は現場の外に存在する客観性という権威に支えられることになるだろう。「支えられる」と言うと聞こえはいいが、言い換えれば現場の与り知らぬ基準で個々の実践が評価されるということでもある。もちろん時には、実践の正しさの信念を補強して、実践者にも対象者にも安心感を与えることに貢献する場合もある。しかしそれが落とし穴なのだ。対人援助の実践は、特殊な文脈のなかで具体的な実践者と具体的な対象者との間で生じる事象であり、そこにはまだ言葉にされていない多様で豊かな意味が含まれているかもしれない。ところが外部の一般的な基準で実践を切り取る限り、私たちの目からはその可能性は隠されてしまう。

本書の最大の貢献は、現在の「エヴィデンス」概念によって隠蔽され、忘れられがちとなっている本来あるべきエヴィデンスの再構築を試みたこと、そしてそれによって対人援助の実践やそれを支える人間科学を再生させようとしたところにある。筆者たちは、用語や議論の仕方に若干の違いはあるものの、エヴィデンスを単なる「客観的」な事実ではなく、実践の場における自己や他者との対話のプラットフォーム、あるいはそこに至ろうとする契機として定義し直そうとしているように思える。それがもっとも顕著なのが５章・６章であり、精神療法や保育の現場において対象者との間で生じる主観（あるいは間主観）に向き合うことをエヴィデンスの土台としている。ここで注意すべきなのは、「向き合う」ことは通り一遍の反省ではないという点である。それはむしろ、１章などで説明されている「本質観取」にも通じる、自己との持続的な対話を必要とするだろう。またこの過程は、２章や３章で述べられているように、他者に伝わる言葉を見出すための対話にも関係しており、場合によっては実際の他者との間における問いかけと答えの反復のなかで、次第に形をとってくるものである。エヴィデンスはそこで、実践の外にある事実というよりもむしろ、実践のただ中でそれを妥当化する意味や根拠として再定義されることになるだろう。

想像できるように、現在の「エヴィデンス」概念の背後には、私たちが実証を通じて真理に一歩ずつ近づいているという伝統的な近代科学の考え方がある。私の専門でもある臨床心理の実践なども、脳科学などとの接近に伴って、ますますその考え方に取り込まれつつあるように思える。もちろんそうした新たな知見を利用することの意義を否定する必要はないし、利用できるところは利用して私たちの身の回りの困難を技術的に取り除いていけばよい。重要なのは、それがどういう意味をもっているのか、もう一度私たちの主観と生活世界に差し戻して考えてみることだ。本書はその道筋を、いろいろな角度から示したものとも言えるだろう。個々の実践や研究の場でこれをどう生かすかは、本書の筆者たちから読者に届けられた宿題ではあるが、それも含めて私は、実践とその研究に関わるすべての人に本書を勧めたいと思う。